



話題の本棚

青羽悠著『22歳の扉』

デレク・ジャーマン著、ハワード・スーリー写真、山内朋樹訳『デレク・ジャーマンの庭』

特集／オススの本教えてください

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

喪失と決断の青春小説——致死量の左京区、そしてその先へ

22歳の扉

青羽悠著
集英社



「理解するより早く、新しいことが目の前にやってくる。私たちは今ってものに剥き出しになって、曝されているんだ。だから、いつだって不安になっている場合じゃない」。

出会いと喪失。追憶と焦燥。懊悩と決断。疾走の日々の、その先。すこいものが生まれる瞬間に立ち会ってしまった。そして確信する。本作は作家・青羽悠の集大成であり、代表作になるはずだと。

◆京大若手作家・青羽悠の最新作にして集大成

京大出身の若き作家、青羽悠。小説すばるの新人賞の史上最年少受賞『星に願いを』そして手を『で鮮烈なデビューを飾った彼は、京大在学中に『風に溺れる』『青く滲んだ月の行方』を上梓し、一昨年には壮大なファンタジー『幾千年の声を聴く』で新境地を切り開いた。そしてこの春、彼は満を持して新たな物語を世に放つ。

◆致死量の左京区——僕達の京都の物語——

数学が得意な主人公・田辺朔の大学生活は、キャンパスの地下でひっそりと開かれるバーでの出会いを期に劇的に変わってしまった。風のように自由なバーのマスター、時計台登頂を悲願とする学ラン男、演劇部のカリスマ女優、滔々と漢詩を語る老師……田辺の周り

の人物はみな魅力的で、是非ともバーに潜り込みたくなってしまふ。そんな本作の舞台は京都……のだが、京都すぎる。桜咲く鴨川デルタ、銀杏だらけの東大路通り、糺の森の古本市、十一月祭、そしてフンピカならぬキューチカのサークルのボックス……そう、これは他ならぬ僕達の京都の物語だ。致死量の左京区がここにはある。と、魅力を語り出せばキリがないが、これだと彼がまるでエモ売り作家みたいじゃないか。もちろんこの作品は青春小説としても素晴らしいけれど、エモの一言で片付けていいものじゃない。彼はもっと普遍的なものに、青春の日々のその先に手を掛けたのだから。

◆「場」が繋ぐもの、救うもの

本作には、どこか村上春樹を思わせるような喪失の陰が滲む。未来はどこまでも逃げ水で、私達は拭いきれない空洞を抱えている。でも、青羽悠が描く人間は（村上春樹のそれよりよっぽど）喪失を勇敢に受け止めて、誠実に傷ついている。それでもなお今を信じようとする。「生きていかなきゃいけない」と、「生きていく」という目の前の現実を、意志に塗り替えて生きている」のだと叫ぶ。

彼は一貫して願ってきた——デビュー作では夢の行方を星に、本作では喪失の彼岸を「場」に。人々のあいだを揺蕩い、共鳴し、繋がっていく「波・音・網」という彼のモチーフがあるけれど、本作で描かれるのは、その繋がりを結んで生み出していく「場」だ。

どうかあなたもこの物語と出会ってほしい。そして生まれる繋がり、読者たちを網のように結ぶ新たな「場」となる。今を生きている僕達が開く扉の音は、ここからどこまでも反響していく。（浅煎り）

（三三六頁 税込一九八〇円 4月刊）

没後三〇年、今も変わらぬ庭を名訳とともに

デレク・ジャーマンの庭

デレク・ジャーマン著

ハワード・スリー写真

山内朋樹訳 創元社



最近、周りに庭好きの人が増えてきた。かくいう私も小さな小さな菜園をもっている。どうして、みな庭に惹かれるのだろう。庭というものはきっと不思議な魔力をもっているにちがいない。

デレク・ジャーマンは映像作家だ。恥ずかしながら作品を見たことではないけれど、性と暴力を主題とする論争的な作品が多いらしい。表紙に映る、穏やかな微笑みを浮かべた彼からは想像もつかないが一九四二年、ロンドンに生をうけたジャーマンは、約八年にわたるHIVとの闘病の末、五二歳でこの世を去った。病の感染が判明した年から、パートナーのキース・コリンズや、本書の写真を撮影したハワード・スリーらとつくりあげてきた庭の記録がここには収められている。最晩年に至るまで、その筆は自然への驚きと喜びを素朴に記し、差し迫る最期の時への恐れを悲しくも情熱的に歌いあげた。花の変化を、昆虫たちの集いを愛おしむジャーマンは一人の無垢な少年だ。だが、命みなざる自然に逆らうかのように弱っていく自身を意識するとき、彼は死を待つ老人のようである。

*

ジャーマンがひとめぼれしたダンジネスは、原子力発電所を有する荒涼とした土地だった。その荒地に彼は菜園をつくった。「菜園

は庭にあらわれる。そして、いくつかの庭は菜園そのものだ。僕の庭もそのひとつ」。でも、青々と繁るモネの庭のようではない。前庭は、玉砂利の白いキャンバスに石で円を描き、浜辺で拾ってきた流木や錆びた金属を奇妙に配置する。まるで古代の儀式場のよう。裏庭はもっと自然体。なるべく自然のなすがままに。

人工世界の極北をなすような原子力発電所に面しているからこそ、ダンジネスの庭はいっそう自然の輝きを放つのだろう。「ダンジネスがもっとも素晴らしいのは夏の夕陽のなかにあるときだ。」「……」発電所の向こうに太陽が沈んでも、青白い玉砂利はなお光をたたえ、ピンクから骨のような白色へと変わっていく。こここの黄昏はほかには代えがたい。まったく静けさのなか薄明が尾を引いている。ここに立てばこう思うだろう――時も寝れて微睡んでいるのだ、と。しかし自然のたくましさ、みずみずしさはときおり彼のうちに死への恐怖を呼び覚まし出した。

ぼくのカーネーション、バラ、青いスミレ、

喜びの消えた愛しい庭よ、

また春に帰ってきてほしい。

寒くて、寒くて、寒くて、ぼくは静かに死んでいく。

ダンジネスの太陽と庭は、彼の凍える夜を溶かしただろうか。ジャーマンの愛したイヌバラはきっと、今も変わらぬそこに咲き続けている。

(はらん)

(一四八頁 税込四一八〇円 4月刊)

〈特集〉 オススメの本教えてください

編集委員の筏は絶望していました。「異分野の話なんもわからん」。他の編集委員の書評を読んでは自らの知識の乏しさを恥じていました。編集委員になって一年、ようやく名案を閃きました。「編集委員に直接オススメの本を聞けばいいんだ！」筏はひとまず目の前にいた文学研究科の二人に話を聞くことにしました。



◆文学研究って何するの?◆

筏…荒砥さんは今年度入会ということで、まだまだ専門について詳しく知らないんだよね。古代ギリシア・ローマ文学ということだけだ、そもそも文学ってどう研究するの?

荒砥…ひとくちに文学を研究する、といってもいろいろな対象、手法があるので難しいね。「文学」というのも韻文と散文があって、古代から現代まで時代が違えばアプローチの違いもあると思うから。ただ、ある程度共通した観点というのはあって、それを知るうえで参考になる一冊が『クリティカル・ワード文学理論』(フィルムアート社)。フェミニズムや精神分析等々、文学作品をどのような視点から読むのか、最新の研究成果を踏まえて解説してくれる。用語解説も充実しているから、辞典的な使い方をすることもできるよ。

朝露…フェミニズムの視点で文学作品を解釈する、というのは具体的にどういうこと?

荒砥…例えば、ある作品に表象された形で現れる、当代のミソジニー的な価値観を見出し、それが作品全体の構造の中でどのような役割を果たしているかを分析する、みたいなこと。もちろん文学作品を根拠に理論を構築することもあるから、この辺りは双方向の作用だね。

◆西洋古典学の射程は?◆

筏…ありがたい。じゃあ本題というか、荒砥

さんの専門を詳しく教えて貰ってもいい?

荒砥…僕の専門分野は西洋古典学といって、主に紀元後2世紀ごろまでの古典ギリシア語・ラテン語で書かれた作品が研究対象。小説はかなり時代が下ってから現れるから、このころの文学作品は基本的にみな韻文なんだよね。だからいろいろな韻律に対する理解が不可欠なのが他の文学との違いになるかな。分野を概観したい方向けの入門書はたくさんあるけど、『古典の挑戦』(知泉書院)はホメロスや悲喜劇などオノソドックスな内容から、テクストの伝承にかかわる文献学から思想・法学に至るまでの幅広い分野を、最前線の見地から解説した本。高校生以上が想定読者だから、一回生からおすすめ。



朝露…古典ギリシア語の作品というと、僕は哲学が専門だからプラトンなんかが真っ先に思い浮かぶんだけど、文学の方はピンと来なくて。何かおすすめの古典はある?

荒砥…ギリシア古典文学といえばホメロス、というわけで最近新訳も出た『オデュッセイア』がおすすめです。あと悲劇のソポクレス『オイディプス王』『アンティゴネ』あたりもいいと思う。ラテン文学だとオウィディウス

『変身物語』にはナルキッソスの物語とか、日本でも知られた神話がたくさん語られていて馴染みやすいね。変わり種で言うところ、同じ詩人の『恋の技術』は古代ローマのナンパ指南本！闘技場で女性に声をかける方法なんてのが書いてある。

朝露…ナンパ本（笑）。しかも闘技場で、っていうのがローマらしいね。

筏…原典についてもっと深く知りたい人向けの専門書は何かある？

荒砥…少し踏み込んだ研究としては、『ホメロスと色彩』（京都大学学術出版会）がおすす。ホメロスは海を形容するとき「青色の」とは決して言わず、「葡萄酒色の」と言うんだ。他にも、「銀色の足のテティス」みたいな現代人には分かりづらい表現もある。こうした色彩語彙から、当時の人々が色をどのように認識していたのか、ひいては世界をどのように認識していたのかに迫る一冊。

筏…原典とかは色々と挙げてもらったけど、具体的な研究手法が見える本ってないの？

荒砥…それじゃあ、さらに専門的な議論を知りたい人向けに『西洋古典学のアプローチ』（晃洋書房）を挙げておこう。基本的には西洋古典学の論文

集だけでなく、分野外の



人にも理解してもらえるように背景知識や用語の説明が取り入れられているよ。さっき紹介した『変身物語』に関する論考も載ってる。とはいえ簡単な内容じゃないから、対象とされている原典の邦訳——もちろん古典ギリシア語、ラテン語の原文でも——に目を通した後、じっくり腰を据えて読むのがいいかな。

筏…さすがに原文はきつい（笑）。でもせっかくだからラテン語を勉強してみたいね。

荒砥…独習したいなら『しっかり学ぶ初級ラテン語』（ベレ出版）がいいよ。実はラテン語文法ってみんなが思ってるほどは難しくないから、ぜひチャレンジしてほしいな。

* * *

◆「分析哲学」「大陸哲学」って何？◆

筏…さっき文学から思想の萌芽を掬い取って話があったけど、思想・哲学の領域で文学に近い書き方の本もあるよね。言葉が曖昧だったり技巧的だったりするのが苦手なんだけど、ぼくに合うような哲学ってないかなあ。

朝露…よきた！ それじゃあ今度は僕から、分析哲学の話を見せてもらおうかな。

荒砥…分析哲学……確か先月号の書評でもさうって使ってたよね。

朝露…そうだね。哲学には方法論の流派みたいなものがあるって、分析哲学もその一つ。言語の分析を基盤として、数学のように明晰な

論述を行う、英米圏で主流のスタイルなんだ。筏…そういえば、「大陸哲学」って言葉と一緒に聞いたことがあるよ。

朝露…分析系と大陸系、あえて両者を対照する時に使われがちな言葉だね。大陸系は曖昧さを保ちながら複雑な現実を理解しているとする哲学潮流で、フランス辺りを中心としているから「大陸」と呼ばれるんだ。

荒砥…なんか明晰と曖昧って聞くと、分析哲学の方がエライみたいでは？

朝露…僕の言い方だとそう聞こえちゃうね。でも千葉雅也の『現代思想入門』（講談社現代新書）曰く「世の中には、単純化したら台無しになってしまうリアリティがある。この本はポスト構造主義を中心に大陸哲学の空気を感じられて、読み方指南もある良い入門書だよ。

◆分析哲学の世界を覗いてみよう！◆

筏…分析哲学の方は何から読み始めよう？

朝露…そうだねえ。分析哲学は対象が何でも広いから、その発展の歴史か方法論自体を切り口に整理されるんだけど、まずはやっぱり方法論を味わってほしいな。というわけでオスズメなのが、八木沢敬『分析哲学入門』（講談社選書メチエ）。この本は分析哲学の歴史的説明はほとんどせず、「ある」とは？「知っている」とは？のようなトピックを

実際に考えていくんだ。議論に使う概念の意味を明確に定義しながら、問題を細

分化して検討していく……そんな分析系の方法論は、理屈っぽくて無味乾燥なんじゃなく、本書曰く「カラッとして明るい」。そんな知的楽しさを、身をもって味わえること請け合いたよ。

筏：面白そうなのは伝わってきた。けど……、やっぱり日常言語を使う以上は真偽が曖昧になっちゃうんじゃないの？

朝露：うお、鋭いツッコミ。実はそうした問題意識から、分析哲学の発展過程で論理実証主義というものが試みられたんだ。ということでもう一冊、青山拓央『分析哲学講義』（ちくま新書）をご紹介します。こちらは新書ながらもトピック解説だけでなく、今した話を含む歴史的経緯の解説、科学や数学との関わり、著者自身の関心までギュッと詰まっているんだ。ちなみに、筏さんの専門は数学だよな？

筏：そうだよ。

朝露：ならマやヨのような量子子を使った述語論理の記法に見覚えがあると思うんだけど、それが開発された哲学史的意義なんかも本書ではよくわかってきくと面白いよ！

筏：がぜん気になってきた。



荒砥：せっかくなら、入門書だけじゃなく「原典」の哲学書も知りたくなってっつるね。

朝露：じゃあ王道の読書案内はさっきの本に任せて、ちょっとスペシャルな一冊を紹介しよう。『確率の出現』（慶應義塾大学出版会）。

これはハッキングと

いう分析系の哲学者が大陸哲学のスタイルを取り入れて論じた本なんだ。しかも

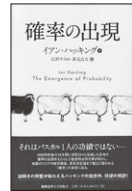
テーマは「確率」！ 筏さんにピッタリかもね。

筏：て、てんこ盛りすぎる！ 詳しく教えて。

朝露：前提として、確率という概念を分析すると、意味に二元性が見られるんだ。サイコロで偶数が出る確率、みたいな統計的確率と、明日の降水確率、みたいな情報の信頼性を示すもの。それで、二つのうちどちらが「確率」の本質なのかが議論になっていた。

荒砥：ここまでの話は分析系、でいいんだよね。じゃあ大陸哲学的な方法、というのとは？

朝露：この分野にハッキングは、フーコーの「知の考古学」の手法で切り込んだんだ。曰く、「現在の考えや概念を生み出した起源を探り、その考えや概念の変化を明らかにする」やり方。つまり彼は、人はなぜ「確率」概念を編み出したのか？ を歴史に問うた。



それによって、「確率」の意味の二元性は、概念が生まれた瞬間から内在する避けがたいものだということを示したんだ。

筏：数学的な概念である「確率」も、解釈には二義性があるなんて意識してなかったな。

荒砥：言葉の使われ方に着目するのは、何か文学研究に通じるものも感じる……。

* * *

◆数学はとっつきにくい！◆

朝露：『確率の出現』を読んで数学にも興味が湧いてきたんだけど、いざ読もうとすると数学の本ってとっつきにくいんだよね。

荒砥：字面から意味が推測しにくい専門用語が多くて内容を理解するのに時間がかかったやうな。数式を追うのもしんどいし……。

筏：ベタだけど、

『数学ガール』シリーズ（SBクリエイティブ）がおすすだね。パーゼル問題を

はじめとして高校数学を超えたテーマを幅広く扱いつつ、小説形式で対話を重視した書き方がされているよ。レイアウトも工夫されていて、数式が追いやすいのも良いね。

荒砥：見やすいのは良きそうだけど、議論に置いてけぼりにされないかな。突飛的な変形とか、直観的じゃない概念が出てくると一気



に分からなくなるんだよね。

筏：ご安心を。読者の「わからない」を代弁してくれるキャラクターが登場するのが一番のおすすめポイント。新しい概念が導入されてもそもそも数式の意味がわからない、数式の意味が分かっててもその概念をなぜ導入するのか分からない。こうした数学を楽しむ壁を言語化してくれるキャラクターの存在は、読者にとって良い道しるべになると思うよ。

◆数学者はなぜ数学をしているのか？◆

荒砥：そもそも高度な数学って現実から遠いよく分からないものをやっているもの、という印象を受けるんだよね。数学者は何に惹かれて数学をしているの？

筏：面白いから、だね。では何が面白いのかというと、意外な関係が発見したとき、数学の世界はよくできてるな、面白いなど感動するんだ。数学者が「数学そのもの」について考える本としては『数学する精神 増補版 正しさの創造 美しさの発見』（中公新書）がおすすぬ。前半では、数学の歴史に触れながら「人間と数学」の不可分な関係性について語っているよ。「正しさ」や「美しさ」といった人間の価値観が、数学の創造的な営みに寄与しているという立場で情熱的に綴られているよ。数学が持つ人間臭さが伝わって、数学を身近に感じてくれると嬉しいな。

朝露：数学の人がよく言う「美しさ」って分かるような分からないような。きつと関係が意外ってだけではないんだよね。

筏：本書の言葉を借りれば「美しさ」とは「整合的であること」だね。他にも様々な条件を比較しながら言葉を尽くして説明されているんだけど、後半では「美しさ」を実感できる例が紹介されているよ。数学における「記号と意味」という二面性に着目して紹介されているんだけど、組み合わせの数という「意味」から定義された概念が、「意味」を離れて形式的な「記号」操作を通して、整合性を保ったまま拡張されていく様は圧巻さ。

◆数学は「正しい」のか？◆

荒砥：概念が拡張されていく様は興味深いけど、拡張によって「正しさ」が失われたりしないのかな。拡張された概念や数式の中には物理学のように現実世界の実験で検証できないものも出てくるよね。数学は「正しさ」をどうやって保証しているの？

筏：その発想めっちゃ良いね！ 数学の才能あるよ。数学を形式化して数学の「正しさ」を保証しようという目的から始まった数学基礎論という分野があって、その問いには一定の答えが出ているんだ。あえて衝撃的な言い方をすると、標準的な数学の世界においては、自分たちの世界が決して矛盾しないことを証明できないんだ。

とを証明できないんだ。

朝露：ゲーデルの不完全性定理だね。数学の「正しさ」には限界があるということだろうけど、今なお数学は発展しているよね。数学者はこの「限界」をどう受け止めているの？ 筏：多くの数学者はあまり気にしていないだろうね。数学の「正しさ」を安易に信奉することとは難しかったけど、一歩ずつ正しい議論を積み重ねていく歩み自体はこれまで通りだからね。一方で、不完全性定理を機に数学基礎論が生まれたり、「できる」ことを追求したゲンツェンの試みが新しい世界を切り拓いたり大きな契機となったのは間違いない。数学基礎論の営みはコンピュータ科学の重要な理論へと繋がっていくんだ。『コンピュータは数学者になれるのか？』



『プログラムの理論へ』（青土社）を是非読んでほしいな。これまでに述べたような数学基礎論とコンピュータ科学を縦断する壮大な物語の中で、悲観的に語られがちな側面ばかりでなく肯定的な面をしっかりと強調している情熱的な一冊だ。

荒砥：数学の歩みはまさに、studium generatum（熟意は熟意を生む）だね。

新刊コーナー

放浪・雪の夜

織田作之助傑作集

織田作之助著
斎藤理生編
新潮文庫

織田作之助、通称「オダサク」。大阪を代表する作家で、太宰治・坂口安吾らとともに「無頼派」と称される。その名に違わず、ヒロポン注射を片手に連日徹夜で小説を書き飛ばし、三五歳の若さで結核のため没した、放蕩無頼の作家——。名前は聞いたことがあるけれど、作品には触れたことがないという読者に、オダサク入門にうってつけの短編集を紹介したい。

オダサクの小説は、大阪の庶民の暮らしぶりにスポットを当てたものが多い。登場人物は皆、手堅い職に就かず、各地を転々としながら波瀾万丈な人生を送っている。例えば、「雪の夜」の坂田。女給に入れ込んで財産を使い果たした彼は、別府に駆け落ちして大道易者のその日暮らしに落ちぶれる。「放浪」の順平は養家の居心地の悪さに耐えかね、料亭次期当主の座を捨てて出奔。やくざ者の子分とし

て危ない橋を渡る。ドジな順平は、あるとき全財産の入った紙袋を川に落としてしまつ。自分だったらと思うと肝が冷える一幕だが、深刻な場面を軽妙に描くのがオダサクならではの筆致だ。荒波に揉まれながらもしぶとく生活をつづける登場人物たちは皆、たくましく、方言を多用した軽快なリズムもオダサク文学の魅力だ。「不注意者」「でん公」「おんべこちゃ」……。耳慣れない言葉に戸惑うかもしれないが、巻末には編者による丁寧な注解がある。安心してディープな大阪の下町に飛び込んでほしい。

(三二〇頁 税込六九三元 4月刊)

種村季弘コレクション

驚異の函

種村季弘著 諏訪哲史編
ちくま学芸文庫

本を読み漁りたい、ある種の飢餓感に襲われる、そんな読後であった。

ドイツ文学者として教壇に立つ傍ら、膨大な数の著作と訳書を世に問うた種村季弘。「知の無限迷宮」の怪人」を前にして新たな読者が尻込みせぬように、との配慮から編ま

れたのが本書である。疾風の如く洋の東西を駆け巡る種村を必死の形相で追いかけるうちに、知的好奇心の炎が燃え上がる。

師を崇敬する編者、諏訪哲史が選び抜いたラインナップをみてみよう。「吸血鬼幻想」はヨーロッパ中からかき集めた吸血鬼伝説に、科学や心理学の側から考察を加える。伝承の森で生き続けてきた吸血鬼は、種村の手によって、女性から精気を奪っていくブレイボーイや血に飢えた異常犯罪者の原型として現れる。学術的オカルト論者の中でも「少女人形フランシヌ」は興味深い。かの著名な哲学者アカルトが肌身離さず持ち歩いた少女の自動人形。その謎に迫り、行き着くのは、デカルト哲学の本質をもなす母の喪失体験と母なるものの永遠の希求である。

「洋の東西区談比較」や「地球空洞説」など、心拍数の上がる題が並ぶなか、注目したいのは種村の自伝的作品「落魄の読書人生」と「文字以前の世界——童話のアイロニー」である。碩学怪人を創り上げた土壌は美しく奇天烈。その彼が若者に残した言葉には、消えることのない芯を感じる——「これっきりしかない現実の他にもう一つ自分だけの世界を持っているというのは、生きていくうえで張り合いにもなると思うんですよ」。(はらん)

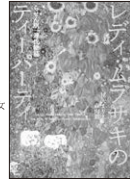
(三三二頁 税込一四三〇円 2月刊)

レディ・ムラサキのティーパーティー
らせん訳「源氏物語」

穂矢まりえ／森山惠著

講談社

——いつの時代の
ことでしたか、ある
エンペラーの宮廷で
の物語でございます。



ワードロープのレディ、ベッドチェンバー
のレディなど、後宮には……。——

あの『源氏物語』が一風変わった空気をまと
っている！ 引用は、世界最初の英語全訳
『A・ウェイリー版』を現代日本語へ〈戻し
訳〉したものから。本書は、この戻し訳を行
った姉妹二人による評論エッセイ。翻訳の道
程で二人が探索した深い森に読者を誘う。

二人は、この訳を「らせん訳」と呼んでい
る。平安時代の物語がウィクトリア朝末期の
英国で訳され、そしてそれを現代の日本語へ。
「単に行って帰ってきた」わけではない。そ
の翻訳は線的な移動ではなく、まさに螺旋階
段のよう。原点から遠ざかったかのように思
えるが、階段の上から覗き込むとわかる。異
なる時代や言語、文化が幾重にも重なった結
果が、このらせん訳である。

果たして『源氏物語』は異国の地どう響

いたのだろうか。頁をめくると姉妹の対話が開
かれる。トウノチュウジョウがゲンシを詠ん
だ「賢木」帖の和歌はシェイクスピアのソネ
ット一八番と響き合うのでは？「蓬生」の
末摘花にはシャルル・ペローの「眠りの森の
美女」の一節が！この「文学的多重性」こ
そ、ウェイリー訳の、そしてらせん訳の魅力
であり、『源氏物語』が持つ包容力なのだ。
姉妹の話は尽きない。まるで、彼女らのお
茶会に少し背伸びして参加しているような、
そんな一冊だ。二人のあとがきはこう終わる。
「紫式部の花の宴へ、ようこそ」。(ひるね)
(三二〇頁 税込二六四〇円 2月刊)

アメリカは自己啓発本で
できている

ベストセラーからひとく

尾崎俊介著 平凡社



評者は自己啓発本
が好きではない。自
明なことを大きな文
字で長々と説明して

かさばり、値が張るからである。しかし、不
思議と世間的には人気が高いジャンルのよう
だ。なぜ人々は自己啓発本を求めるのか。そ
の答えはこの一冊に書かれていた。本書は十

年に渡る大衆文学研究の集大成である。

著者は自己啓発本を文学ジャンルとみなす
異端なアメリカ文学研究者。自己啓発本は文
学研究の対象たり得るのか、という疑問が浮
かんできくる。しかし、本書で描かれるは、文
章作品とその作品が書かれた当時の社会状況
との相互関係を明らかにする試み。文学研究
の成果そのものである。自己啓発本が文芸作
品であるかは怪しいが、文学研究の対象に相
応しくない、とまでは断言できないようだ。

本書も所詮自己啓発本の類、と侮っている
と硬派な議論から始まり一気に引き込まれる。
自己啓発本が売れる必要条件是「社会の流動
性」と「向上心」の二点。宗教の趨勢や身分
を超えた成功者の登場により、これらの条件
が整い、自己啓発本の誕生へと繋がる。本書
はアメリカにおける自己啓発本のベストセラ
ーを総覧しながら、先述したような社会の変
遷と自己啓発本の流行の結びつきを軽快な語
りで説明していく唯一無二の研究書だ。

自己啓発本は玉石混交であるが、社会の要
求に応え続けてきたジャンルでもある。一冊
一冊は当たりはずれがあるだろうが、全体を
眺めてみると意外な発見があるだろう。自己
啓発本に啓発されなかった人にこそオススメ
したい、メタ自己啓発本。

(茂)

(二七二頁 税込三〇八〇円 2月刊)

通り過ぎゆく者

コーマック・マッカーシー著

黒原敏行訳
早川書房現代アメリカ文学
の巨匠コーマック・
マッカーシー。彼の

遺作となる長篇二部

作が、このたび同時に翻訳刊行された。両者はポビーとアリシアという兄妹をそれぞれ主人公として、合わせて一つの小説となっている。ポビーを中心に展開する本書はどちらかと言えば『表』そして『動』の物語だ。

元物理学者でダイバーのポビーは、人知れず沈没した飛行機に潜るという妙な仕事を引き受けてから、身辺に不審を感じはじめ、

何かが自分を狙っている……。そうして逃亡を図るポビーの旅路が、本書の一心の縦軸である。しかし小説は全体として時系列が錯綜し、筋を追うことが難しい。次々と繰り出される哲学的な対話はこちらの理解を拒む一方で、謎の真相も一切明かされない。五里霧中の読書体験だ。けれどもそれはポビーの旅路と重なり、ひいては本書のテーマ——世界の理不尽と共鳴する。つまり、人間は世界を理解できないということ、そして世界もまた

人間のことを斟酌しない。それは苦痛と孤独に満ちた、残酷な世界観である。

けれども本書は決して露骨的ではない。容赦なく世界に追いつめられながら、それでもなお人は人を愛する。読み終えてわかるのは、本書が痛切なラブストーリーでもあるということだ。……たとえその愛が、世間一般には認められない、兄妹間のそれだとしても。

アリシアの視点から兄妹の過去を語る『セラ・マリス』は対話形式で綴られた『静』の物語で、本書と対をなしている。並行して読むことをおすすめしたい。

(水炊き)
(五七六頁 税込四一八〇円 3月刊)

家を失う人々

最貧困地区で生活した社会学者
1年余の記録

マシューデスモンド著 栗木さつき訳 海と月社



二〇〇八年一月、

記録的降雪にみまわ

れたミルウォーキー

の住宅街、ある家の

チャイムが鳴る——それは強制退去を執行する保安官だった。追い出された母と子は、家具が玄關先の歩道に並べられていくのを、た

だ立ち尽くして眺めることしかできなかった。

本書はアメリカにおける強制退去の問題を扱うノンフィクションである。アメリカでは借家に住む低所得者層の大半が月収の半分以上を家賃に支払っており、家賃滞納を理由に毎年数百万人もの人々が家から追い出されている。著者である鋭敏の社会学者デスモンドは、ミルウォーキーの貧困地区に一年以上住みこみ、強制退去を巡る家主と借家人の関係を調査した。本書は強制退去を執行された八組の家族と、彼らを取り巻く人々の日常を描く。

なぜこうも強制退去は生じてしまうのか？ それは単なる貧困の帰結ではない。家主が差別的に借家人をえり好みすることで、黒人やシングルマザー、薬物中毒者といった人々は回避され、少ない選択肢の中で物件を借りる。これに目をつけた家主は貧困地域で物件を買ひ漁り、割高で貸しつける。滞納したらすぐ強制退去させ、次の借家人をみつけないという「貧困ビジネス」がまかり通っているのだ。

強制退去は家財の喪失や強いストレスにより人々を悪循環に引き込む。つまり「強制退去のせいで貧困になると著者は強く指摘する。淡々とした筆致でたゞひたすらに厳しい現実を浴びせ続け、読者の心を掴む。ピュリッツァー賞をはじめ名だたる賞を総なめした、傑作エスノグラフィー。

(たいやき)
(三三三頁 税込三五二〇円 12月刊)

恋愛の哲学

戸谷洋志著

晶文社

昨年公刊された

『友情を哲学する』

(光文社新書)に続

き、『恋愛の哲学』

が上梓された。筆者はプラトン、ヘーゲル、

ボーヴォワールら七人の哲学者の恋愛論を、

身近なあるあるを織り交ぜながら紹介する。

「恋愛とはなんだろうか」。本書はこの問い

とともに始まる。恋愛は私たちの生活や価値

観を激変させ、人生を大きく変えるものとな

りつつが、私たちは恋愛について正解を知っ

ていないわけではない。恋愛は上手く扱うこと

が難しいものであるにもかかわらず、取り返

しのつかない事態や暴力をもたらしつつ、極

めてリスクの大きいものなのだ。本書で紹介

される恋愛論は、そのような性質を持つ恋愛

を問い直し、そして思考するための方途を示

してくれるだろう。

七人のうちの一人であるレヴィナスによれ

ば、他者は自己の価値体系を破壊し、それに

還元できない無限性を備えたものとして現れ

てくる。そのような他者を理解できると思ひ

込むことは他者を否定することであり、暴力である。しかしだからといって、他者の理解を諦めることが正しい態度かといえは、そうではない。レヴィナスが重視するのは、話し合うことすなわち「対話」、そして触れ合うことすなわち「愛撫」である。

本書で展開される恋愛論は、恋愛だけでなく親子や友人との関係にも当てはまるところがあるだろう。七つの恋愛論と筆者の解説は、我々がこれからも他者と関係を築いてゆくにあたり、役立つに違いない。

(投稿・アミ)

(三三六頁 税込一七六〇円 2月刊)

ヨーロッパ社会思想史
新版山脇直司著
東京大学出版会

社会思想ってなん

だろう? 分からな

いこともないけど輪

郭はどこか曖昧……

と、そんな方はこの一冊をどうぞご覧あれ。

本書は政治に経済、さらには自然観や宗教

観までも含んだ総体としての社会について、

古代から現代までの思想の糸を通史的に描き



出す。社会思想を掲げた類書は数あれど、本書の分かりやすさは群を抜く。学部生でも安心して読めることは請け合いた。実は本書はロングセラーの教科書の三〇年ぶりの改訂版なのだが、その根強い人気にも頷ける。

さて、本書の魅力をご紹介。各章に「〇〇と現代」というコラムが付されているのだが、これがまた読者の好奇心をそそる。例えば古代ギリシャのソフィストらと現代のポピュリズムとの共鳴、フランス革命期の混乱とポスト冷戦期の迷走との相似……。人間と歴史は悲惨を繰り返す。だからこそ、たかが数百年程度では思想の現代的意義は薄れない。思想とは物知り顔せんがための飾りにはあらず。変化する現代を、不透明な未来を見通す鍵となればこそ、そこには意味が宿る。

ちなみに、タイトルに「ヨーロッパ」の語があるのは、本書に登場する思想が限定的であることの自覚ゆえ。グローバル化した現在、西欧だけが世界の全てではないにせよ、その歴史から学べることは少なくないはずだ。

さしづめ、本書はパスポートだ——ここからアジアへもアフリカへも、過去へも未来へも想像は広がっていくべき。本書を出発点として、新たな社会思想の世界をめぐる旅へ出かけるのはいかがだろうか。(浅煎り)

(二九六頁 税込三五一〇円 1月刊)

反資本主義

新自由主義の危機から〈眞の自由〉へ

デヴィッド・ハーヴェイ著、大屋定晴監
中村好孝／新井田智幸／三崎和志訳 作品社

デヴィッド・ハー

ヴェイはポストモダ

ニズムや新自由主義

についての明晰な分



析で知られ、現代で最も著名なマルクス主義知識人といえる。そんなハーヴェイは、自身のポッドキャスト番組でマルクス主義の視点から現代の諸問題を論じている。本書は、同番組をもとに書かれた一般向けエッセイ集だ。

十九の短い章ではそれぞれ現在も進行中のトピックが取り上げられ、資本主義の現局面を分析する。例えば世界中で台頭する右翼ポピュリズムは、新自由主義による不平等の拡大の中で、大衆の怒りを資本ではなく移民やマイノリティへ向けるものとして出現したと、著者は指摘する。格差の拡大や気候変動など、様々な形で露呈する資本主義の矛盾を突き詰めて、社会主義的な代替案の可能性を模索していくことが、本書全体を貫く著者の意図だ。

本書の特徴は、随所でマルクス『資本論』を引用する点にある。原典を再検討し、現代的な文脈への接続を試みる。筋道立てて丁寧

に論が展開されるため、ハーヴェイの著作の中でも圧倒的に読みやすい。人物名や専門用語への注釈も読者を助ける。また、「略奪による蓄積」や「空間的回避」といったハーヴェイ読者にはおなじみの概念も、具体例とともに詳細に説明される。その意味で本書は、ハーヴェイの数十年に渡る広範な研究活動を一望できる入門書ともいえるだろう。

万博の開発は大阪湾に金を撒き散らし、海底で大きな口を広げる資本家を肥やし続ける。向き合うべき資本主義の危機は日本にも溢れている。今こそ重要な一冊だ。(たいやき)

(三三二頁 税込三三二〇円 12月刊)

徹底討議

二〇世紀の思想・文学・芸術

松浦寿輝／沼野充義／田中純著

講談社



思想・文学・芸術という相互に関連する

三つの視座から二

〇世紀をめぐって徹

底討議を重ねること、そしてそうすることで

二〇世紀の大まかな見取り図を描くこと、そ

れが本書の企図である。この壮大な試みに参

加したのは、松浦寿輝、沼野充義、田中純の

大御所三人。それぞれ主に、フランス、スラヴ、ドイツを専門とする研究者だ。

しかし忘れるなかれ。三人はみな専門以外の知識も豊富に有している。沼野は言う。三人とも「それぞれの本来のちっとした専門を持ちつつも、狭い専門内の詮索を一生の仕事とすることなく、自由に逸脱していくことを身上とするようなところがあって、結局のところ、それがこの徹底討議にも活かされることになった」。この逸脱が肝なのだ。

討議の幕開けを飾るのは、パリの「ベル・エポック」。世紀末から第一次世界大戦までの時期を指す言葉だ。ここから話は、ベル・エポック期の社会を描いたブルーストへ、ブルーストを論じたベンヤミンへ、さらには場所を変えて世紀末ウィーンのクリムトとシールへ、と縦横無尽に展開していく。ひとつの時代を捉えるには、思想・文学・芸術のどの視座も欠けてはならない、そう痛感させられる。

こうして三人は全二回にわたる討議を通じて、戦争、革命、言語、亡命、映像、批評、セクシュアリティといった視点から二〇世紀という時代に鋭く深く切り込んでいく。自分是一体いつになったらこんなにも濃密な対談ができるようになるのだろうか、一介の院生はため息混じりにそう思うのだった。(ばや)

(七〇〇頁 税込四六二〇円 3月刊)

なぜ働いていると

本が読めなくなるのか

三宅香帆著 集英社新書

まるで読書ハウツー本のようなタイトルだ。仕事と読書を両立する方法があるなら、手っ取り早く教えてほしい。そんな思いで読み進めるも、著者が端的に答えを示してくれることにはない。豊富な研究に基づいて近代以降の労働史と読書史の関係を俯瞰しながら、著者は回り道を楽しんでいるようにも見える。

「舞姫」の裏話、謎の親鸞ブーム、円本の成功……などなど、本書は「ノイズ」に溢れている。だって、それが読書なのだから。

働いていると本が読めなくなるのは、物理的な時間だけの問題ではない。著者が暴くのは、「速く、手軽に情報を得たい」という欲求の裏側にある、新自由主義的な社会構造だ。常に「全身全霊」を求める社会では、自分と無関係な情報はノイズとなる。自分から遠く離れた文脈を取り入れる余裕などない。

だが、他者の文脈に触れずに生きるなんて不可能だ。何より、思いもよらない出会いがあるから読書は面白い。手っ取り早く、なんてもったいなかった。「全身全霊」の生き方を見直すきっかけになる一冊。

(二八八頁 税込二一〇〇円 4月刊)

世にもあいまいな

ことばの秘密

川添愛著 ちくまプリマー新書

新書を読まない大学生におすすめの一冊！

さて、本書をおすすめされているのは「新書を読まない、大学生全般」か「大学生のうち、新書を読まない人たち」か。このように一つの表現において複数の解釈が可能な場合、言語学ではそれを「曖昧」と言う。本書は、そんな曖昧なことばの事例を紹介し、言語学者の知見からその原因を検討していく。

曖昧さの発生源は多岐にわたる。例えば冒頭の一例は「修飾語と名詞の関係」で説明される。修飾語が修飾先の名詞に対して非限定的であれば前者のように、限定的であれば後者のように解釈できる。このように、実は読み手（聞き手）の解釈次第で意味が変わってしまう例は多々あり、こんなとき、言語学の分析的視点はとても役に立つ。

本書では、曖昧な事例について文法的に可能な解釈を全て検討する。そこには、誤解なく伝えられたら、という願いと同時に、でもこんな解釈もできるなんておもしろいよね、と著者の声が聞こえる。新書を読まない大学生も夢中になるに違いない。

(二四〇頁 税込九九〇円 12月刊)

民主主義を疑ってみる

自分で考えるための政治思想講義

梅澤祐介著 ちくま新書

この本を手にとった読者は、タイトルや目次に列挙されている政治思想家や哲学者の数々に当然思うだろう、「ハードルが高い」と。「政治リテラシー」の涵養を目的とする本書は、見た目や第一印象ほど小難しく書かれた本ではない。

本書を読んでも、民主主義の良し悪しについて明確な答えは得られない。しかし、一貫して現代の民主制と言われている国に住む人々が政治リテラシーを持つ必要性が問われている。人間は、過去や慣習などから押し付けられる物事に対策を講じることができる。そのため、民主主義に対して疑問を持ち続けながら、政治に参加する「義務」ことが重要なのである。そして、これを実現するために必要な作業が、『民主主義を疑ってみる』ことなのである。

政治思想についての歴史書と言っても過言ではないほど、民主主義や自由主義、共和主義、社会主義の歴史過程を丁寧に辿る。政治に興味がない人を含め、参政権を持つすべての人に手に取ってもらいたい。

(三二六頁 税込一三三〇円 2月刊)

詩と小説——あるイントロダクション

小説はよく読む。でも、詩はあまり読まない。何を言っているのかわからないし、敷居も高そうだし、と、そう思っていました。僕も。そんな僕が今では、泥酔すると将来は詩人になりたいなどと妄想するように。みなさんにも将来の夢…詩人、になってもらうべく、詩をめぐる小説を二つ。

詩で小説を書く

まずはアメリカの小説家兼詩人のリチャード・フロートティガンによる『西瓜糖の日々』を読んでみよう。その世界で人々は、あらゆるもの（服も家も、窓ガラスさえも）を西瓜糖で作り、清らかな流れには鱗が泳ぎ、夜はランプを灯して暮らす。そこがこの作品の舞台、IDEATHという世界。そこで語り手の「わたし」はボーリンという女の子に恋して暮らしている。天気はいつも穏やかで、光はいつもやわらかく、不幸なこととはなにも一つ起きないように思える、そういう世界。

しかし、「わたし」のいる西瓜糖の世界のむこうには、忘れられた世界があって、そのあたりにはインボイルと呼ばれる、ウィスキー臭い息の人々が住んでいる。西瓜糖の世界で暮らしていた女の子、マーガレットはインボイルと忘れられた世界に魅せられていってしまう。平穏な毎日に一瞬の影が差す。

もしこの作品をもっと小説にするとしたら、手に汗握る冒険活劇や謎解きをさせても良いのだけれど、フロートティガンはそうしない。あくまで淡々と、断章形式で、この世界を描くのみだ。そして、読み終えたあなたの脳裏に浮かぶのはあくまで、さらさらとした西瓜糖の世界と、仄見える禍々しさの影。詩で小説を書いたよう

な小説だ。つまり、詩もこうやって読めばいいのかもしれない、と数年前の僕は思ったのでした。

小説で詩を書く

先ほどの作品は詩が小説になっていた。では次は？ というところ、詩を書くことの小説だ。ここからはトーンを変えて、一人称は「俺」で行こう。さて、君は詩というと、なぜか昔のものだと思ってしまうことはないか？ 現代に詩は不可能なのか？ じゃあ、俺たちが囚われている、いま、ここではどうしたらいいのか？ 俺たちの毎日は詩なんかとは無縁の、荒唐に晒された殺伐じゃないか？

詩人の松本圭二が書いた小説集、『詩人調査』の中の自伝的中編、「あるゴダール伝」はその一つのお返事だ。

主人公は作者と同じ名前の松本圭二、「マツケー」。彼は学生会館にいた怪しげな先輩（権田さん）に目をつけられる。権田さんは詩人志望で、周囲の冷たい目をよそに詩を書く、が、いまはもう、「よくある青春」を許してくれる世界じゃない。なあ、よく見てみるよ、君たちの周りの「青春」（カッコ付きの）はなべて、紋切り型で資本ではち切れんばかりの偽物ばかり、そうだろう？

サクセスストーリーも熱い友情も、そのどちらも——どちらの嘘も——描かないこの小説のなかで、二人はあくまで絵にならない青春を生きる。けれど、最後の最後に、権田さんの意志を継ぐかのようになマツケーは一編の詩、「ロング・リライフ」を書く。現代に詩情が一矢報いる瞬間。

ここから彼の、萩原朔太郎賞詩人、松本圭二の、「ロング・リライフ」が始まる。

（コーク）

宮野真生子の仕事——出会い、他者、偶然性

人生を振り返ると、たまに無性に恐ろしくなるときがある。私はいま、京都大学の大学院生としてドイツ思想を研究しているが、これは本当に「たまたまそうなった」としか言いようがない出来事である。学部時代、私は東京の大学に通っていた。しかも学部は商学部。思想とは無縁の毎日だった。しかし二回生のとき、たまたまサークルの友人に誘われて、ある講読の授業を取るようになった。その授業で出会ったのが、現在の指導教官が書いたドイツ思想に関する本。以降、私は思想にのめり込むことになる。そして勢いそのままに、指導教官が在籍する京都大学まで来てしまった。

「たまたま」がいくつも重なって、いまの私は存在する。だからときどきこんな想像をする。もしあのとき授業で指導教官の本が選ばれていなければ、もしあのときサークルの友人に誘われていなければ……。こうして人生を遡っていくと、そこには無数の「もし」、すなわち「偶然性」が存在することに気づく。私の人生がいまある姿にならない可能性はいくらでもあり得たのであり、その可能性のあまりの大きさに、私はいつも恐ろしくなるのである。

*

前置きが長くなった。要するに私が伝えたかったのは、人生は偶然的な出会いの偶然的な連なりのおかげに成り立つということである。そしてこの「出会い」や「偶然性」といった問題に誰よりも深く取り組んだのが、九鬼周造研究者の宮野真生子だった。「だった」と書いたのは、彼女がもうこの世にはいないからである。宮野は二〇一九年、がんにより亡くなった。享年四二。あまりにも早い死だった。九鬼はかつて「人間の悩みから生まれ、人間の悩みに訴える哲

学でなければ生命を有った哲学ではない」と語ったが、宮野の哲学はまさにそうした「実存」の奥底から生まれ出た哲学だった。だからこそそれは、読む者の実存をも激しく震わせる。

とくに鬼気迫るものを感じるのには、人類学者・磯野真穂との往復書簡集『急に具合が悪くなる』（晶文社）。

やり取りを重ねるごとに、宮野の病状は悪化する。しかし宮野はむしろ、病気を思考の糧としながら、生と死、出会いと別れについて、磯野と言葉を交わし続ける。そして最後の書簡、死の数週間前、宮野は九鬼の『偶然性の問題』を引きながら、他者との偶然的な出会いを引き受け、そこから新しい始まりを生み出すことを私たちに求める。宮野は最後まで偶然性を肯定し続けた。「人生は何が起きるかわからない、だから楽しい」という信念とともに。

宮野と九鬼の哲学の二端に触れたら、次に繙きたいのは『言葉に会う現在』と『なぜ、私たちは恋をして生き

るのか』の二冊（ナカニシヤ出版）。前者は宮野の未刊行の文章を集めたもので、偶然論、共食論、恋愛論などが展開される。後



者も恋愛論だが、しかしなぜ恋愛なのか。それは恋愛においてこそ「独立なる三元の邂逅」としての「他者との出会い」が問題となるからだ。そして最後に取り組みたいのが、博士論文『出逢いのあわい』（堀之内出版。九鬼における出会い、他者、偶然性という問題は、この二冊で見通しがつく。出会いという向き合い、それをどう引き受け



編集後記

3月号から編集委員に加わりました、水炊きと申します。好きなものは推理小説とスケッチ、それから水炊きです。ペンネームは三つ目の好物からとりました。よろしく願います。

水炊きとは、調味料を加えずにお湯だけで煮る鍋の総称です。どんな出汁を使うのか、どんな具材を煮込むのか、地方やご家庭によってさまざまあるようですが、私の実家では昆布で出汁をとった鍋に白菜や春菊、豆腐、豚肉を入れ、そんな比較的スタンダードではないかと思われるセットのうえに、たっぷりのうどんを加えていました。食卓に載せられた鍋の中、ほかのあらゆる具材を埋めながら煮立つ、白い麺の海。うどんを吸いたければ鍋ではなくうどんを食べれば良いはずですが、調味料を介さない素朴な味わいが冬の乾いた喉をつると通って、腹の中にたまって身体を温めてくれる、その感覚が好きなのです。

本を読むこともまた、そのようなものであれば良い、と思います。ときには濃い味付けや繊細な美味に舌鼓を打つものの、何よりも本は生きる糧として、身体の内を温めてほしい。ここで紹介する本がみなさんにとって、ぼくにとっての水炊きであるような本となることを祈ります。

(水炊き)

当てよう！ 図書カード

今月の特集は数学、哲学、文学を専攻している編集者たちがお互いの専門分野について尋ねる、というものでした。さて、数学が英語で mathematics というのはみなさんご存知だと思います。この単語とはある古典ギリシア語の動詞から由来しているのですが、どんな意味の動詞が語源になっているのでしょうか？

1. 遊ぶ
2. 書く
3. 求める
4. 学ぶ

(荒砥)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは7月15日です。



《3月号の解答》 3月号の問題の正解は、2. の753年(訂正:751年)でした。日本の文獻に「梅」という字が登場したのは、最初の漢詩集である『懷風藻』におさめられている「春日翫鶯梅」だと言われています。当選者は、えび天天さん、青でんぶさん、もちえさん、ライヤニさん、レヂデントさんの5名です。当選おめでとうございます。(プラチ)

読者がらひつゝ

○1・2月号で紹介されていた山内朋樹「庭のかたちが生まれるとき」を読み、本書の軸となった福知山の観音寺へ足を運んできました。「庭のレシビ」に触れ、庭の成立する過程を読んだ後に実際(現状)の庭を見るという経験は初めてです。本書でも庭は変化し続ける」と書かれていましたが、本書に封じられた姿からも更に庭は変化し続けていると感じました。(文学研究科職員・青でんぶ)

——本をきっかけに気になる場所に行く、非常に貴重な経験を共有いただき、ありがとうございます。今後本をもっと出会えたモノがありましたら、是非ご共有ください！
訂正とお詫び

『綴葉』3月号(No. 425)の「当てよう！ 図書カード」において、解答に誤りがありました。正しい解答は751年であるにも関わらず、解答の四択に含まれておりませんでした。該当号における当選者は、正しい解答に一番近かった2・753年を選択してくださった方の中から選ばせていただきました。ご回答くださった方々をはじめ、読んでくださった皆さまに深くお詫び申し上げます。

(プラチ)